

フレッシュマン・ゼミ（山田フレゼミ）2006.05.17.

野口恵子（2004）：『かなり気がかりな日本語』集英社新書
はじめに／あとがき

山田 晴通

はじめに（pp.9-14）：

<日本語ブーム>→実は、<「日本語本」の出版ブーム>にすぎない

★主な「日本語本」：

大野 晋（1999）：『日本語練習帳』岩波新書

→ 大野 晋（2002）：『日本語の教室』岩波新書

齋藤 孝（2001）：『声に出して読みたい日本語』草思社 →シリーズ化

北原 保雄・編（2004）：『問題な日本語』大修館書店 →続刊

読書人口が増えたようすも見られない。...大人たちまで携帯メールに没頭し、本を読む人は明らかに減っている。政治家の暴言、妄言、失言はあとをたたく、敬語や慣用語は間違っ使われ、陳腐な接客マニュアル語は一向に改められない。(p.9) (★根拠?)

「日本語本」は買っても、コミュニケーション能力向上をめざして何か（音読、読書、語彙形成、その他）を実行したりはしない

→「気にはしつつも、なかなか改められない」

老いも若きも、かなりの人々が何となく日本語が乱れていると感じ、自分自身の日本語を磨きたいと願い、コミュニケーションのあり方も改善されるべきだと思っているのは確かなようだ。日本の言語文化の行く末に一抹の不安を抱いている人もいるだろう。(p.10)

<日本語の乱れ>というと若者の言葉づかいが槍玉に挙げられるが、大人も同様

→きちんと教えなかったこと、

自分たちにもきちんとした日本語が身に付いていないことを反省すべき

(★「乱れ」という捉え方は「日本語」ではなく「国語」的という見方もある)

(★けんもほろろ＝「無愛想に人の頼みや相談事を拒絶して、取りつく島もない状態」)

若者の日本語...<世界が限られている>→運用の手本、借用のもと、参照すべき対象

同世代との会話、メール

テレビのバラエティー番組

接客マニュアル語それだけから形づくられているとしたら、狭すぎる

もつとも、大人も<広くかつ深い日本語の世界>をもっていない

本を読まないせいで語彙が乏しい

対面コミュニケーションが苦手

(本書の構成=もくじ)

大学生の言語コミュニケーション [第一章]

大人(「先輩たち」)の言語コミュニケーション

...特に、はやり言葉 [第二章] と敬語 [第三章]

コミュニケーション不全の現状 [第四章]

より豊かな言語コミュニケーションへの方策 [第五章]

→<唯一の方策>などないと承知した上で実践すること

最近の日本語とコミュニケーションについて考える材料の提供をめざす

「日本人/外国人」は「日本語母語話者/そうではない者」の意味で用いる

あとがき (pp.203-205) :

樋口裕一 (2000) : 『ホンモノの文章力』 集英社新書

樋口裕一 (2002) : 『やさしい文章術』 中公新書ラクレ

野口悠紀雄 (2002) : 『「超」文章法』 中公新書

レポート : ×報告、×説明 : ○分析、○意見、○主張...自分の意見の『報告』

「さらなる」 : ×「一層の」 ... (★この野口氏の主張には異論もある : 誤用→慣用)

内容より体裁を重視するという本末転倒

分析・意見・主張の不在

言葉に対する鈍感さ

...への警告=本書が言いたかったこと